

poeta doctus

—『死者の書』をめぐる—

北川原 平造

一、創作という卒業研究

本学の卒業研究は、文芸作品の研究・考察のほかに、創作という形で、二年間の学習成果を提示することも認められ、従来の固定化した、「研究」という概念にとらわれない、進歩的な考え方をとり入れている。

そこで思うのであるが、国文学の研究といえど文献をどう読み解いていくか、あるいは、文学史の流れの中で、いかなる位置づけがなされるかなどというような、学問的操作が主となるのは当然のことであるが、場合によっては、研究の対象とする文学作品のほんとうの文学的価値に対して、かならずしも、適切な理解の行き届かぬまま、換言すれば、とんでもない誤った評価をしたままで、形のうえでは、いかにも学問的操作をほとんどこして、研究成果はかくの如しと言わんばかりの論文が、世間にはたくさんある。あの人は国文学の研究をしているのだから、さだめし日本の文学、文芸に対しては、深い理會をもっているのだからと素人は思うだろうが、実際はそうとばかりも言えな

い例はよくある。ついにながら、「国文学」という語は、一方で、研究対象としての文芸作品を指すと同時に、日本文学の研究そのものを意味しておって、ほんとうはまぎらわしい。だから、研究の方は、「国文学学」というべきものであろう。しかし、今さらそういうのも仰々しいというだけの話である。

国文学の研究ということになれば、それは客観的、科学的な態度で対象に立ちむかわなければならない。よって、研究者は作品の学問的処理と作品の批評、鑑賞という行為とを、厳重に区別して、これを混同しないように心がけなければならないということになる。文献的な本文校訂という作業は、一応科学的な操作で進められるということになる。ではあるが、錯雑した文献において、どちらを優先させるかというような問題に出あうと、その作家の作品の特質やその作品の傾向などといった問題がからんでくる。そこまできると、やはり文学性の領域に踏みこんでくることになって、研究と批評、鑑賞とは別な仕事であるとは言っていられない。そこが、他の研究分野とは大に異なった性格を、文学の研究は有しているわけである。

そこまで考えてくると、冒頭に触れた、創作という卒業研究の意味は、含意の深いものとなってくる。文学作品というものは、人間存在の根底に触れることによって、読者に感銘、感動を呼びおこす働きをもつものである。そういうものを研究の対象にするのだから、研究そのものが、人間生活に直接し、あくまで、実感に支えられたものでなければならぬだろう。単なる観念の羅列では済まされない。もひとつ、推し進めていかなければ、研究成果が、劇とか小説とかいうような具体的な形にならずに表現されるのが望ましい、ということである。これは、国文学研究という常識からみると、奇異な言説にきこえるかもしれないが、つきつめていくと、そうならざるをえないだろう。これから、その特異な例を略述してみることとする。

二、折口信夫の発想

国文学者折口信夫（一八八七—一九五三）は、日本民俗学の創始者柳田国男（一八七五—一九六二）に師事して、日本民俗学の形成、発展のうえで重要な仕事をするを通して、独自の国文学をうち立てた。いわゆる「折口学」と称されるものは、古代から今日にわたって、文学というものがどのように発生してくるかという点を追及する文学史観を柱にして、「まれびと」「常世」「呪言・呪詞」「語部」「貴種流離譚」「みこともち」「たまふり」「水の女」「神の嫁」など、その文学史観の核をなす用語を創出して説きすすめられ、その業績は没後四十年を経て色あせることなく、ラディカルな暗示を将来にわたって提示しつづけている。そういう国文学者としての営為とならんで、歌人

釋迢空の名で生涯にわたって作歌を続け、近代短歌史のうえに特異な歌風をうみ出し、今日の短歌にとって無視するわけにはいかない影響力を発揮している。さらに、『古代感愛集』『近代悲傷集』などの詩集も残され、前者は昭和二十三年度の芸術院賞を受けている。また、『死者の書』そのほかの小説も書き残している。

世の中には、詩人で、大学のフランス語の教授がおり、物理学の専門家で東京大学の学長を勤める俳人がいる、というような例は、いくらもあるだろう。しかし、折口信夫の場合は、それらの人々とは、少なからず趣きを異にしている。専門領域が国文学であるから当然とはいえ、もろもろの古典籍を読み積くことを通して、古代人の心意に深く迫り、たとえば、万葉人の生活のありのままの姿をさぐり出してみせる。あたかも、折口信夫その人が古代人そのものとなって、万葉集の歌の生命律を語り示すと同時に、現代歌人として、記紀万葉から平安鎌倉さらに近世と流動してきた、日本の詩の強みも弱みも知り尽くしたところから発想した作品を残した。要するに、その国文学研究（もちろん、民俗学研究の業績、また芸能史の樹立、神道学の革新などの広がりを含めて）は、単なる学的営為というにとどまらず、それぞれの時代の生活実感にするべく迫り、それをまたすこぶる具体的姿をもって、創作的労作によって示したという点において、独自の地位を占めている。そこで、いま、小説『死者の書』を読み積くことによって、上述の実際に触れてみようと思う。

三、小説『死者の書』

まず、『死者の書』の梗概あらすじを記してみよう。時は、大伴家持の壮年の頃である。四流に分れた藤原氏の族長（氏ノ上）、南家の豊成、当時太宰師であったその人の一の姫、郎女は、父の影響もあって、漢籍、仏典に心をむける女性である。父より贈られた新訳の阿弥陀經（稱讃淨土仏摂受經）の千部手写を思いたつ。五百部を越えた頃から、姫の身は目立ってやつれてきた。八百部に達する頃になると、衰えたなりに、健康は定まってきたように見えた。「やゝ蒼アヲみを帯びた皮膚に、心もち細つて見える髪が、愈々黒く映え出した。」さらに、九百部を過ぎてからは筆は一向にはかどらなくなった。その頃、南家の郎女が、宮から召されることになるだろうという噂が、京、洛外に広がった。屋敷の者は、姫近く仕える人々から下々まで、顔を輝かして期待に胸をおどらせたが、姫には、誰一人その事を聞かせる者はなかった。それほど、この頃の郎女は氣むづかしく、まわりの者には見えた。千部手写の望みは、そうした大願から立てられたものだろうと言う者さえあってそれを否定する者もなかった。「南家の姫の美しい膚は、益々透きとほり、潤んだ目は、愈々大きく黒々と見えた。さうして、時々声に出して誦する經の文が、物の音に譬へやうもなく、さやかに人の耳に響く。聞く人は皆、自身の耳を疑うた。」

ところで、郎女がこの經文の千部手写をはじめてから、不思議なことに出逢っている。去年の春分の日、姫は、入り日の光りをまともに受けて正坐して西に向かつていた。落日の転き

がやむと、夕闇の上に、鮮やかに二上山の姿がみえ、その二つの峰の間に、ありありと莊嚴しょうげんな人の倂しやうじんがあらわれて消えた。姫の心は、その時からいよいよ澄んだ。しかし極めて寂しくなっていく。それから半年、秋の彼岸中日の夕方、あの春の日のように、落日に向かつて坐していた。「雲がきれ、光りのしづまった山の端は、細く金の外輪を靡よどかして居た。其時、男嶽オノガキ・女嶽メノガキの峰の間に、ありありと浮き出た 髪 頭 肩 胸。姫は又、あの倂を見ることが、出来たのである。」今年の春となつて、姫は、ある心躍りを一月も前から感じていた。いよいよ千部目の写經にとりついて、彼岸中日、春分の空が朝から晴れてのどかな温い一日を書きついで、ついに經卷の最後の行、最後の字を書きあげて、姫はほっと息をついた。ふと気がついてみると、あたりは俄かに薄暗くなっている。いつの間にか雨が降り出している。「姫は、立つても坐しても居られぬ、焦燥せうさうに悶もえた。……茫然として、姫はすわつて居る。人声も、雨音も、荒れ模様に加つて来た風の響きも、もう、姫は聞かなかつた。」

その夜、忽然として姫の姿は屋敷から失われた。神隠しに遭つたと思われた郎女は、しかし夜一夜歩きとおして、二上山の麓、当麻たぎまの邑むら、落慶供養の済んだばかりの万法藏院の境内にたどりつき、塔の下にたたずんで、二上山を見つめていた。それから騒さわぎは大きくなったが、つづまりは、郎女自らの意志で、寺の淨域を穢けがした贖あがないのため、ここに止まることとなる。万法藏院の北の山陰にある廬堂いろうどうをその場所として。かくして、奈良の屋敷から駆けつけた身狭乳母むさのちおも以下侍女たちにもまれて、贖罪の日々がはじまる。しかし、その贖いの終りはなかなか

見えて来ない。侍女たちは、日々の徒然を消すべく、寺の蓮田におりて茎を摘み、藕糸を縊りあげる。郎女がやがてこれを上帛に織りあげる。こう話が進んでいけば、なんだ、これはあの中將姫の伝承をあらためて語るにすぎないではないか、と早合点しそうになる。たしかに、中將姫伝説に歩み寄りながら、すこぶる深刻な展開をとげてゆくことを言わねばなるまい。

実は、この小説は、異様な書き起こしで始まる。二上山の峰と峰との間にある塚に葬られた滋賀津彦（大津皇子）の骸がおもむろに蘇ろうとするところから語り起こされる。「彼の人の眠りは、徐かに覚めていった。まつ黒い夜の中に、更に冷え圧するものゝ澱んでゐるなかに、目のあいて来るのを覚えたのである。した　した　した。耳に伝ふやうに来るのは、水の垂れる音か。たゞ凍りつくやうな暗闇の中で、おのづと睫と睫とが離れて来る。」暗黒の塚穴のなか、岩牀の上にうごめく滋賀津彦の魂は、死の際に一目見て深く執した女性、耳面刀自をよぶ。「耳面刀自。おれには、子がない。子がなくなった。おれは、その栄えてゐる世の中には、跡を貽して来なかった。子を生んでくれ。おれの子を。おれの名を語り伝へる子どもを――」その滋賀津彦の執念が耳面刀自とみこんだ郎女にむかつて激しく迫る。郎女が見た、彼岸中日、二上山の二つの峰の間にあらわれた莊嚴な人の倂と墓の骸とは二重写しとなる。耳面刀自とは、郎女の曾祖父不比等、淡海公の妹。滋賀津彦の魂は、天若日子、世にいう天若みこのごとく、藤氏の美しい女にしたいよる。冒頭において、隠り世から送られてくる、激しい氣息が、この物語の世界構造をまず暗示する。そもそも、滋賀津

彦の魂を呼びさましたのは、郎女が当麻にたどりついた夜、あくがれ出た姫の魂を呼び戻そうとして、当麻真人の家人たちがした山尋ねの咒術が原因であった。二上の当麻路の関にある塚の前でした魂呼いの行。

さて、奈良の屋敷、横佩牆内で写経の了った、春の彼岸中日の夕は雨。期待に胸をふくらませていた郎女は、かの倂人にまみえることを得なかった。あれから廬堂に贖罪のためこもって春がすぎ、夏が過ぎ、やがて秋の彼岸。

その間に、いくたてもの話が語られて、おもむろに物語の核心へと迫っていく。まず、郎女が、旧山田寺と伝えられてきた廬堂に宿らされた最初の夜、当麻語部姫が、姫の座近くしつび入って、未生以前の昔語を長々と語る。中臣・藤原の遠祖が、天二上に求めた天八井の水―天子の御料としての聖水―を汲み奉仕する藤原の女の由来を述べる。さらに、滋賀津彦の反逆と刑死。この二上の山上、当麻路の脇に埋けられたことに語りおよんで、耳面刀自への執心が今に残り、郎女を求めている。その力に誘かれてここまで引き寄せられたのだと、郎女を脅やかすように語りきかせた。その夜明け前、激しく戸をゆする物音があつた。次の夜は、奈良の屋敷の者たちが駆けつけて、荒れた廬堂も繕われ、帳台も用意されて、安らかな寝所に郎女はこもる。しかし、天若御子―滋賀津彦は、郎女の夢の中に訪れてきた。「白い骨、譬へば白玉の並んだ骨の指」が、帷帳をつかむ。やがて、郎女は、海中に白玉を拾うとみたが、その白玉と合体して、一幹の白い珊瑚の樹となる。夢からさめた郎女が無意識に呼びかける語は、「なうく阿弥陀はとけ……。」すな

わち、当麻語部姫の語った滋賀津彦のうす気味悪さと彼岸中日に望み見た聖なる佛と、大きな異和感をいだいたのが、いつの間にか合体した。その夜以後、郎女は、「つた つた つた」とひびく物音をひたすら待つ女となる。夜深く帳台のうちに醒めて物思うさまを、侍女らは、姫の魂があくがれ出ていると、心を痛める。郎女にとって贖いの月日は、同時に待ちのぞむ日々となる。

ようやく待ちつけた、秋の彼岸中日、昼過ぎてはげしい暴風となる。姫をかこんで女たちは寄りそって暴風のすぎるのをこらえている。ふと気がつくと、姫が消えている。女たちの恐れさわざ、「あっし あっし あっし」と警蹕を発し反閉している頃、郎女は、寺門に立って、山の際の空を見入っていた。やがて、山の空は夕映えに燃えたち、そのあとへ、肌、肩、脇、胸、豊かな姿が……「庭の砂の上すれ／＼に、雲は揺曳してそこにあり／＼と半身を顕した尊者の姿が、手にとる様に見えた。匂ひやかな笑みを含んだ顔が、はじめて、まともに郎女に向けられた。伏し目に半ば閉ぢられた目は、比時、姫を認めたやうに、清しく見ひらいた。軽くつぐんだ唇は、この女性に向うて、物を告げて／＼も居るやうに、ほぐれて見えた。」「なも 阿弥陀ほとけ。あなたふと 阿弥陀ほとけ。」三度めの出逢いで、尊者の御顔をほつきり仰ぎみることができた。

一方、奈良の都では、南家の郎女の神隠しの話がひろまる。朱雀大路を馬を遣っていた大伴家持も、その噂をいち早く耳にした。父の任地、太宰府へ年若く下って、大陸の文化になじみ、唐詩のおもしろさに心引かれる、新しい時代の人でありなが

ら、一方では、古い歴史を負う大伴の氏の長者として煩わしい責務を負って、今の世を生きている。その家持も、横佩家の郎女に関心を抱いていた。この噂を聞いて、ほのかな感傷がその心を浄めるように湧いた。しばらくして、郎女の叔父、大師恵美押勝と語る機会があった。話はおのずと郎女の神隠しのことに及ぶ。家持が、「横佩境内の郎女は、どうなるでせう。社・寺、それとも宮」。どちらへ向いても、神さびた一生。あつたら惜しいものでおありだ。」と感慨を述べると、「氣にするな。氣にするな。氣にしたとて、どう出来るものか。此は——もう、人間の手へは、戻らぬかも知れんぞ。」と押勝が、独り言めいていう。郎女の将来を暗示する詞が早くも発せられていた。物語の筆は、奈良の都の明るく閑雅な風物を描きながら、古い習俗が、新しい体制のなかで力を失っていく有様を説くことに力を入れていく。時代は変革を余儀なくされている。たとえば、「古い氏種姓を言ひ立て、神代以来の家職の神聖を誇つた者どもは、其家職自身が、新しい藤原奈良の都には、しだいに意味を失つて来てゐる事に、氣がついて居なかつた。最早そこに心づいた、姫の祖父淡海公などは、古き神秘を誇つて来た家職を、末代まで伝へる為に、別に家を立てて中臣の名を保たうとした。さうして、自分・子供ら・孫たちと言ふ風に、いちはやく、新しい官人の生活に入り立つて行つた。ことし、四十を二つ三つ越えたばかりの大伴家持は、父旅人の其年頃よりは、もつと優れた男ぶりであつた。併し、世の中はもう、すっかり變つて居た。見るもの障るもの、彼の心を苛つかせる種にならぬものはなかつた。淡海公の、小百年前に実行して居る事に、今

はじめて自分の心づいた鈍ましさが、憤らずに居られなかった。さうして、自分と同じ風の性向の人の成り行きを、まぎ／＼省みて、慄然とした。現に、時に誇る藤原びとでも、まだ昔風の夢に泥んで居た南家の横佩右大臣は、さきをと／＼し、太宰員外帥に貶されて、都を離れた。さうして今は、難波で謹慎してゐるではないか。」というように。

さて、秋彼岸中日三度めにまぎまぎと俳人の姿を見た郎女は、機を織りはじめる。侍女たちの續んだ藕糸をもって。「此機を織りあげて、はやうあの素肌のお身を、掩うてあげたい。」とこのことのみ考えて、夜の更けるまで織りつづけるが、思うように機は動いてくれない。断れては織り、織っては断れという有様。そこへ不思議な尼が現われて、織りのこつを授ける。郎女は教えのごとく織る。はた はた ゆら ゆらと織り進める。それは夢だったが、現実はそのまま美しい織物となつてゆく。姫の織り上げた上帛の、譬えようもない美しさとずっしりとした手ざわりに、乳母も侍女たちも感動する。郎女は五反目を織りきると、俳人の素肌の肩を掩う衣、それは幾人分にも当る大きな衣を縫いにかかるが、早く縫わねば寒さがやつてくると焦つても、思うにまかせない。またしても、夢に化尼が現われて、「壁代の様に縦横に裁ちついで、其まゝ身に纏ふやうになさる外はおざらぬ。それ、こゝに紐をつけて、肩の上でく／＼りあはせれば、昼は衣になります。紐を解き敷いて、折り返し被れば、やがて夜の衾にもなります。天笠の行人たちの著る僧伽梨と言ふのが、其でおざります。早くお縫ひあそばされ。」と教える。ようやく縫ひあがつた衣を前にして、「これで

はあまり寒々としてゐる。殯の庭の棺にかけのひしきもの――喪氈――とやら言ふものと、見た目にかはりはあるまい。」と郎女はつぶやき、次の営みを考えていた。

郎女は、奈良の屋敷にある、唐の絵具を取りよせて、大衣に目をすえた。袈裟でいえば、五十条の大衣とも言ふべき、藕糸の上帛。やがて筆をとりあげる。「郎女は唯、先の日見た、万法藏院の夕の幻を、筆に追うて居るばかりである。堂・塔・伽藍すべては、当麻のみ寺のありの姿であつた。だが、彩画の上に湧き上つた宮殿楼閣は、兜率天宮のたゞまひさながらであつた。しかも、其四十九重の宝宮の内院に現れた尊者の相好は、あの夕、近々と目に見た倂びとの姿を、心に覚えて描き願したばかりであつた。」刀自・若人たちは、ただただ見ほけるばかり。郎女は、筆をおいて、にっこりと笑みをなげかけて、のどかにしかし音もなく、廬堂を立ち去つた。残された大衣に描かれた絵様は、姫が、唯一人の色身の幻を描いたに過ぎなかつたが、数千地涌の菩薩の姿が、見守る人々には、浮きでていた。人々の見た白日夢。藕糸曼陀羅。

四、学術と創作と

物語の大むねを語るために、意外に紙数を費したが、単純な古物語のように見えて、その語りのひだの深さに、時折り踏みとどまざるをえない。この作品を通して、作者が、読者に説いていることは何だろうか。「山越しの阿弥陀像や、彼岸中日の日想観の風習が、日本固有のものとして、深く仏者の懷に採り入れられて来たことが、ちつとでも訣つて貰へれば、と考へて

みた。」と、「山越しの阿弥陀像の画因」(一九四四年・昭和十九年七月)で述べている。「死者の書」はその五年前に書かれている。これは、単なる「死者の書」の解説というものでなく、独立した考察といふべきで、わが国に、山越しの阿弥陀像という特殊な阿弥陀像図の出来てきた道筋が説かれている。これを読むことで、「死者の書」という、ある意味で、まことに晦渋な小説によって説こうとしたところを了解することができるようになっている。すなわち、右の引用にあるように、大昔から日本人が伝えてきた習俗が、新しくはいってきた高等な学や宗教を、いかにも日本的な性格に仕立てていったところを、学的考察を踏まえながら、小説・物語といった血・肉を備えた創作物によって、読者に提出している。

南家の郎女が、彼岸中日、二上山の峰と峰との間に見た佛は、阿弥陀如来であると同時に、それは大昔から、日本人の伝えてきた、太陽そのものを神として拜む信仰が根幹に働いて、出現した。古代宮廷において、日祀部^{ひまつりべ}なる聖職の存在が、日神に対する特殊な信仰を示し、民間にあっても、春と秋との真中頃、すなわち彼岸の中日に当る頃、日の出から日の入りまで、日を迎え、日を送り、また日かげと共に歩み、日かげと共に憩う信仰が行なわれていた。それが、女性のもっぱらにする習俗となつて、深い印象を残している。それは、田植えを迎える物忌み―「山ごもり」「野あそび」の習俗もこれに包含されて―もある。わけて、「女の旅」とも言うべき行事として伝えられた。郎女の、当麻の邑へと誘かれた根底には、それが働いた。

郎女が、二上山の峰の間に佛人を見る―そういう形で、尊い

仏が現われる画像のもとを辿れば、すなわち、「山越し阿弥陀像」は、天台僧源信(平安中期の人)が、比叡の横川で感得したところを自ら描いたと伝えられるものが、そのはじめであろう。ところが、この慧(恵)心院源信は、当麻にほど近い狐井・五位堂のあたりの生まれという。さすれば、幼時より二上山の峰と峰との間に落ちる日の転^{くるま}きを見て生い育ったにちがいない。「山越し阿弥陀像」の成立の根源には、源信が幼な心に深く刻んだ二上山の落日が働いているにちがいないだろう。さらに、日想観の風習は、まるまる仏教に由来すると考えては、さきに述べた日本古来の習俗が無視される。四天王寺の西門に、彼岸の夕、西方はるか沈む日を拜む人々が群れ、さらに「日想観往生」、あるいは熊野の「普陀落渡海」の風習にみられるように、彼岸中日に、何ものかに誘^{おび}かれるように、大空の日を追う心意は、日神に対する古代からの信仰が、仏教信仰と結びあつて生じたものである。

そのように、「渡来文化が、渡来当時の姿をさながら持ち伝へてゐると思はれながら、いつか内容は、我が国生得^{シヤトク}のもの」と入りかはつてゐる。」ことを、証拠をあげて説きすすめるのが学問研究の仕事であるが、折口信夫は、それで満足しない。これを具体的な人間の行動と心意の動きにのぼせることによつて、はじめて「実感」として把握されることとなる。南家の郎女の体験は、長い習俗としての日神に対する信仰が、無意識のうちに郎女をつき動かして、彼岸中日の山の空に、莊嚴の佛人を現じたのである。それと同時に、藤原氏の女性として、聖水をもって天子に奉仕する伝説が、その血に流れ伝わっているが

ゆえに、天八井の伝承をもつ二上山にむかわしめ、その山中に葬られた滋賀津彦（大津皇子）の執念を身に受けることとなる。人間の意識の底に深く沈みこみ潜んでいるものが、時あつて、人間の存在をゆすりあげて来る。郎女の、何ものかに誘^{おび}かれて、当麻に至り、藕糸曼陀羅を残して消える道筋に、それを見ている。

いま、「山越しの阿弥陀像の画因」によりながら、折口信夫の意図するところをなぞってみた。だが、これがその全てではない。この二十章に及ぶ物語の含む問題をさらにとりあげてみたい。

冒頭の滋賀津彦の魂のよみがえりは、いかにもおどろおどろしい描写に充ちているが、いわゆる未完成霊の問題につながるであろう。若く、生を完成しないで死んだ霊魂の、現世と幽界との中間にたどよう姿を語っている。戦後、あの戦争で死んでいった、おびただしい若者の霊の問題を痛切に思いなやんだ折口信夫は、単なる国文学者、あるいは歌人ではなかった。そこには、硫黄島で戦死した養嗣子春洋^{はるみ}に寄せる個人的な想いを、普遍に高めて、「民俗史観における他界観念」等の論考を通して、日本民族の育ててきた霊魂の問題に深くかかわる哲学者ですらあった。さらには、国文学の発生において追及してきた、「とこよ」「まれびと」の論へのつながりのなかで、滋賀津彦の登場は意味をもってくるであろう。

当麻語部姫^{たぎまのかたりのおむな}なる老女は、郎女の廬堂に宿った最初の夜から登場する。七一〇年、奈良に都が開かれた。七五二年、大仏開眼供養が営まれた。万葉集もこの頃、今の形にまとまろうとし

ていた。そして、時代は、古代氏族政治から、唐にならって新しい官僚政治（律令）体制へと変わるにつれて、諸事万端、旧習の尊重を失おうとしていた。古代氏族の歴史と伝統を重んじてきたところにも変化が生じていた。それぞれの氏族の歴史を語り伝える語部たちの職能が、ともすると見捨てられようとして、彼らを焦立たせていた。当麻語部姫にしても、今は都住まいの氏上が、氏神当麻彦の社へ拝礼に来る。その神祭りに、呼び出されて、当麻氏の古物語を語るべく、期待をこめていたが、何の音沙汰もない。「もう、世の人の心は賢しくなり過ぎて居た。独り語りの物語などに、信^シをうちこんで聴く者のある筈はなかった。聞く人のない森の中などで、よく、つぶ／＼と物言ふ者がある、と思うて近づくと、其が、語部の家の者だつたなど言ふ話が、どの村でも、笑ひ咄^{べん}のやうに言はれるやうな世の中になって居た。」と、「死者の書」にも描かれている。そこで、われわれの、万葉集の読み書き方に重要な視点を与えてくれる。人麻呂から家持にわたる万葉の時代というものが、単一簡素なものであるはずがない。それを総合して、折口信夫が、「万葉びと」なる語を以て示したものは、「飛鳥朝から藤原・奈良時代にかけての、われ／＼の祖先の生活の、各方面を綜合した」ところの実態を指しているであろう。語部の、生きた姿というものの、折口信夫の実感として把握したものが、ここに描き出された。当麻語部姫は、おのれの命を打ちこんで、郎女の魂に語りかけている。

また、大伴家持は、すでに述べたように、新と旧との間^{はざま}に立って、孤独者のかなしみを噛みしめるところまで来た。実は、

それが、万葉集の読み方を支える点でもある。万葉の太さ、力に對して、万葉の細みを、早くから認め主張した。「死者の書」に描かれた家持は、まさにそれを示している。

なお、巫女―神の嫁、その他説かねばならぬ問題は多いが略する。

五、ポエタ・ドクトウス

ここで、考えてみなければならぬ点は、折口信夫が、右のように、学的成果を創作の形において示すことがもっとも理想の形だという実践を是認するとして、では、その創作が、文学としてほんとうに価値あるものになっているか、否かという問題である。その短歌、詩については、今さら言うまでもなく、評価されているところであるが、「死者の書」はどうであろうか。折口信夫、五十三歳、一九三九年、昭和十四年に執筆、発表された。しかし、当時これをまともに論評の対象として、意見を述べるものは、ほとんどなく、無視されたかのごとくであった。戦後、いやその死後に到って、ようやくまともに論ぜられてきた。そして、その評価はすこぶる高いと言うべきであろう。そのなかの一つ、川村二郎の見解を紹介する。中央公論文庫本の「死者の書」の「解説」として書かれたものである。まず、冒頭に、

『死者の書』は、明治以後の日本近代小説の、最高の成果である。

こう書くと、いかにも独断的、主観的、恣意的な断言にきこえるだろう。ぼくとしても、せめて、「最高の成果の一つ」

ぐらいに譲歩すべきか、という氣持がなくてはならない。にもかかわらずあえてこのままにしておくのは、とりわけ今日、現代小説のあり方とか方向とかを考えようとする時、この作品ほど過去の重さと豊かさをそなえながら同時に未来を指し示している小説は、ほかに見当たらないと思うからである。そういう、いわばアクトチュアルな意味において、これは近代最高の小説、模範的な小説である。つまり単なる記念物、文化財といった意味での名作、傑作、「古典」ではない、ということである。

と述べている。近代小説は、西欧の小説を典範として、自己の道を模索してきた。その西欧の文学の本質は、相反するものを一つに結ぶ原理―弁証法である。「超越と現実、運命と自由意志、精神と肉体、そういった二元論的対立が、克服しがたい断絶の相を示しているという認識、それにもかかわらずこの二元の対立が、何らかの媒介、仲保的契機によって超えられねばならぬ、超えられるはずだとする確信。この認識と確信との協同作業の上に、キリスト教のみならず、すべてのヨーロッパの精神的価値が成り立っている。」しかし、日本の近代小説は、その典範に對して、どれだけの成果をあげたか。疑わしいなかにあつて、『死者の書』は、きわめてアクトチュアルな意味をもつ。「この小説は、その成立に際して、弁証法を本質的な契機としている。岩牀の暗黒は、人間界から隔絶したその奇怪な秘密の性格において、到達するすべもない超越の世界である。この暗黒に對して、奈良の都の風景は、明るくのびやかな、地上の世界を示している。しかしこの二つの世界は、それぞれ別個に存在し

ているのではなく、前者の影が後者に落ちかかり、地上の世界がその影に染められて、不思議な色調の濃淡と起伏を生じ、立体的な遠近法のうちに、次第にその真の姿をあらわしてくる。その世界の中で、現実とは超現実と一体となり、リアズム風描写は幻想的、幻視的表現と呼応し、そして登場人物たちは、一応個人として明瞭な輪郭を示しながら、しかも岩牀の上で呟く死者が、さらに遠い蒼古の世の、神話的形姿と重なり合っているのと同様に、単なる個人以上の性格をそなえ、一つの集団が全体として夢みる夢の理想的な姿、いわば全体の象徴と化してしまふかのようなのである。」と、川村は説く。さらに、「生を象徴的に捉えること」に成功していると言う。これだけ引用すれば、この小説の価値がいかなるものか、見当がつく。

今日、折口信夫、釋迢空を「詩人学者」と呼ぶのが通例になっている。その「詩人」とは、小説も含めてよいであろう。そういう呼称の生じたものは、高橋英夫が、「折口学の発想序説」(「中央公論」一九六八年、昭和四十三年二月号)で、ヴァルター・イェンスの用いた「ポエタ・ドクトゥス(poeta doctus)」を借りて、折口信夫の学問と創作との統一体を示そうとしたのが、はじめであろう。もちろん、そういう見方は早くからあった。

三島由紀夫が、「折口信夫氏は日本のウォルター・ペイターと謂ふ処を持つてをられた。芸術家の魂を持った学匠であり、直感と豊かな想像力が学問的正確さと見事に融け合つた稀な方であつた。」と、一九五三年、昭和二十二年十一月の「三田文学」、折口信夫の没後いち早く出た追悼号に寄せた文の冒頭で

書いている。なお、三島は、それから九年たって、旧約のヨブを思わせる、と書いている。それこそ、折口信夫の本質に深く迫る把握であるが、本稿の論旨からそれるので、略する。

要するに、折口信夫の学的成果に対して、釋迢空の文学的所産が、現代の文学として十分な評価をえていることを述べようとしたのであるが、そのまま冒頭の言説に戻ることになる。紙数を超えたので、終末部は簡略にすぎた。他日を期したい。